

東国の初期前方後円墳を めぐる諸問題

古墳時代像の再構築をめざして

Issues Related to the Early Keyhole-shaped Tombs in the Eastern Provinces : To Reconstruct the Image of the Kofun Period

広瀬和雄

HIROSE Kazuo

はじめに

①各地の様相

②東国前期古墳の特質

③新しい東国古墳時代像を求めて

おわりに

【論文要旨】

「東国の前方後円墳の出現は遅い」、「前期には前方後方墳が卓越している」などが、東国古墳時代像の大きな規定的要因になっている。大和政権の地方支配が段階的に実施されたから、西日本にくらべて東国支配は遅れた、との通説がその根底に横たわっている。さらには、「東国には独自の世界が展開していて、西日本の前方後円墳に対抗した勢力があった」との含意が、そこにはあるようだ。それとは矛盾する「東国文化停滞論」なども敷衍されているが、いったい東国の古墳時代は特殊なのだろうか。

茨城県梵天山古墳や神奈川県秋葉山2号墳など、古墳時代初期から東国でも前方後円墳は造営されているし、栃木県駒形大塚古墳など初期前方後方墳は、同時期の前方後円墳との共通項が目立つ。すなわち、初期前方後円墳は東国もふくめた列島各地で、いわば「同時多発的」に造営されたのである。この事実は、大和政権が段階的に列島支配を拡大していく、との通説に見直しを迫る。

第一、古墳時代初期には東国から九州までおよぶ、各地域で自給できない鉄・鏡などの「もの」や、高度な技術を保持した人びとの獲得をめぐる首長ネットワークがあった。第二、それを構成した首長層の帰属意識、〈われわれ意識〉の表示として前方後円墳や前方後方墳が一定の階層的序列をもって機能した。その頂点には、大和川水系の有力首長層で構成された中央政権（大和政権）が聳立していた。第三、前方後円墳や前方後方墳を媒介とした、広域的で強固な政治ブロックは認めがたい。つまり、大和政権と同盟を結んだ東国という政治社会は認識できない。

威信財や権力財などの再分配システムを、畿内有力首長層が主導的に運営した。それをスムーズに進行させることが首長層の利益にかなう、共同体の再生産につながるという意味での利益共同体が、古墳時代初期には広域的に形成されていた。そこでは前方後円墳祭祀というイデオロギー的一体性が流布され、その中核を畿内有力首長層が担っていた。古墳時代初期の東国首長層もその一角を構成していた。

【キーワード】 前方後円墳, 前方後方墳, 東国支配, 東国停滞論, 東国史観